さんこ狐の話

百年程前、高津野にさんこという悪賢い古狐が住んでいた。百姓は冬になると小作米を地主に納めるためにそりに積んで、角間川の地主の家に運び、その帰りに町から魚や果物を買って帰るのであった。途中、野崎には茶屋があって、酒好きの人はこの茶屋で一杯飲んで帰るのを楽しみにしていた。

ある日、久作という百姓が角間川の地主に小作米を納め、焼餅とハタハタを買い、藁つとに入れ、そりにしっかりと結んで帰って来た。酒好きの久作は野崎の茶屋で一杯引っ掛け、ほろ酔い機嫌で高津野にさしかかった。

日も暮れて薄暗く、かすんで遠くまでは見えなかったが、久作は慣れた道だから上機嫌で来ると、若いきれいな女が立っていた。女は久作に、

「これから阿気まで行くのだけれども、道がよく分かりません。一緒に連れて行ってください。」

と頼んだ。久作は

「それなら方角が一緒だから、このそりに乗れ。」

とその女をそりに乗せ、道を急いだ。

ところが、歩いても歩いても高津野の林から抜けることができなかった。すると、足元であひるが一羽、ぎゃあぎゃあと鳴いて羽をばたばたとさせていた。久作はそのあひるを捕らえようと追い掛け、追い掛けしているうちに誤って堰に落ちてしまった。

酔いがいっぺんにさめた久作は狐にだまされたと気が付いたが、もう女もあひるもいなかった。そりに結んでいた焼き餅もハタハタも全部盗られて何一つ残っていなかった。今まで歩いていたと思ったのは同じところをぐるぐると回っていたのだった。

久作ばかりではなく、他の村人もさんこ狐に化かされ、饅頭と思って馬の糞を懐に入れて来たり、風呂に入ったつもりでいたら、実は野原の肥だめであったりと散々な目にあっていた。村人たちはなんとかしてこのさんこ狐を退治しようと思っても利口なさんこ狐はなかなかその手には乗らなかった。

大慈寺谷地に右の目がつぶれた爺さんが居た。ある日、この爺さんが角間川の町へ魚を買いに行った。角間川の町は大変繁盛していて、市日には在所からたくさんの人が買物に来ていた。

爺さんも魚を買い、こだしこに入れて背負って帰り、野崎の茶屋で一杯飲み、雪の降る中を上機嫌で高津野に差し掛った。

家では婆さんが夕飯の支度をしていたが、表の戸をたたく音がした。婆さんは爺さんが帰ってきたと思って、入り口の戸を開けると

「今、帰った。」

と言って、爺さんが中に入ってきた。見ると爺さんは右の目がつぶれているはずなのに、左の目がつぶれている。婆さんはさんこ狐が化けてきたなと思ったが、知らぬ顔で囲炉裏の側に座らせた。

「今晩は爺さんの好きな油揚げ料理を作ってご馳走するかな。」

と言うと、爺さんは婆さんの作った料理をうまそうに食べた。婆さんが、

「寒いから一杯飲んで体をぬくめて早く寝たほうがいいな。」

と言うと、爺さんは婆さんの出した強いドブロクを何杯も飲んですっかり酔ってしまった。婆さんが

「爺さん、今夜もいつもの通り袋に入って寝るかな。」

と言うと、婆さんが出した大きな麻の袋に入って良い機嫌で寝てしまった。婆さんは大急ぎで袋の口を紐でしっかりと結び、縄でくるぐるに巻いて梁に吊し、囲炉裏に松葉をくべていぶした。袋の中のさんこ狐は苦しくなって

「ぎゃん、ぎゃん」

と叫びながらもがいたが、袋から出ることができなかった。

婆さんはさんこ狐を捕らえたと村人に報せると、村の衆は今まで散々化かされていたので、一目さんこ狐を見ようと大勢集まって来た。梁から降ろし、狐の手足をしっかりと結び、袋から出してみると、銀色の毛の大きな古狐で、皆で狐鍋にしてしまえ、敷物にすれば良いなど言い合うと、村の長老が出てきて

「このような古狐を殺すと後のたたりが恐い。お稲荷様にお願いして、その使い者にした方が良いだろう。」

と言ったので、中島の長太郎稲荷様にお願いして、今後悪さをしないように頼み、十日町山へ放した。さんこ狐は頭を下げながら山の中に消えていった。

それから高津野で狐に化かされることはなくなった。さらに村に大水が出たり、火災や疫病が流行る時には、夜中にきゃんきゃんと叫びながら村の衆に報せる狐の声がたびたび聞こえたそうだ。

これは長太郎稲荷様がさんこ狐を使って村の衆にお告げをしているのだとして、油揚げや鶏肉を神社の縁の下に上げておくと、何時の間にかなくなっているそうだ。